

## 口頭発表

## がん終末期の患者に対する一般病院における動物介在療法の一例

佐野葉子\*

富士宮市立病院

## A case study on animal-assisted therapy for a patient with hospital in a general hospital setting

SANO Yoko\*

## 目 的

日本の死亡者数は平成26年度約126万人である。死亡原因の1位は悪性新生物で約36万人、死亡者数の約28.5%を占めている。現在日本において厚労省では、全国どこでも質の高いがん医療を提供することができるよう、都道府県がん診療連携拠点病院と地域がん診療連携拠点病院を407箇所指定している(平成26年8月6日現在)。しかし、がんで亡くなった人の約75%以上は一般の病院や診療所で亡くなっていると報告されている。

このような状況の中ですべての患者が、がん専門病院で最期を迎えることはなく地域の一般病院で入院生活を送ることも多い現状がある。一般病院においては、よりよい最後の時間を過ごすことが出来るよう緩和ケアチームが協力してケアを行っているが、一般病院には病院の規則等があり、患者はがん専門病院のようなケアがすべて受けられるわけではない。

今回がんの終末期の患者に対し動物介在を行い、その時の患者の様子や発言、また家族の思いについて質的に分析を行ったのでここに報告する。

## 方 法

患者は40歳代女性で未婚。両親と同居し、市内に兄夫婦が在住していた。患者はがんの終末期で一人では歩行ができない状態であった。また酸素投与も行われていた。患者の両親と相談し医師の許可があったので、患者の状態が良い日に看護師2名が付き添い、車いすで酸素投与を行いながら移動し、病院の敷地内で患者が飼っているエアデールテリアと20分程度面会を行った。犬との面会前後に患者と両親に思いを語ってもらい、質的に分析を行った。

倫理的配慮については、病院の倫理委員会の承認を

受けた。また患者の家族に研究の説明を口頭で行い同意を得た。

## 結 果

## 1) 面会前の思い

## (1) 患者の思い

- ・犬に会いたいけど一人で歩けないし、入院中は無理だよ。

## (2) 父親の思い

- ・残された時間はあまり長くない。
- ・娘に犬と面会をさせてあげたい。
- ・でも病院の中には犬を連れていけない。
- ・病室は2階だから窓越しに面会させようか。
- ・でも面会できても触れない。
- ・触れない状態で面会させるのは、よけいにつらい思いをさせてしまうのではないか。

## (3) 母親の思い

- ・病院では犬との面会は無理。
- ・何とかして一度家に連れて帰りたい。

## 1) 面会後の思い

## (1) 患者の思い

- ・犬が最初嬉しそうで、でも途中でちょっと知らん顔してあの子らしいと思う。
- ・別に平気だよって所を見せてるんだよ。本当はともううれしいくせにね。
- ・あの子にあえてほんとうによかった。

## 〈ブログより〉

ハルッカ♪とのお散歩の約束が、病気を治すための最高のモチベーション。

## (2) 父親の思い

- ・酸素もやっけていて歩けないから面会は無理だと思っていた。

\* 連絡先：静岡県富士宮市野中 1038-25

- ・看護師さんが面会しようといってくれたけど、本当にいけるのかと思った。
  - ・面会でできて娘も犬も嬉しそうで本当によかったと思った。
- (3) 母親の思い
- ・犬と面会をさせたいと思ってもできないことだとあきらめていた。
  - ・看護師さんに言われてできるのか心配だったけど面会でできてよかった。
  - ・娘も犬もうれしそうだった。

### 考 察

病院に入院している患者の中で、ペットの写真をベッドサイドに飾ってある人はいるが、ペットは病院の中に入れられないため面会はできない。ホスピスなどがある病院では病室にペットを入れられる施設もあるが、一般病院では衛生面や他の患者の配慮からほとん

どペットの入室は許可されていない。

写真では実際にペットに触れるわけではなく、さみしい思いをしている人は少なくない。入院期間が短い場合や、入院期間がある程度決まっている場合は退院の予定があるため多少我慢すればよいと考えられるが、がんなどの患者の場合入院期間の予測が難しかったり、退院できるめどが立たない場合は、ペットとの面会が出来ない事の不安やストレスは大きいのではないかと考えられる。

今回がんの終末期の患者に自分が飼っているペットとの介在を行い、患者が前向きになれた事、家族の満足感を得られたことは大きな効果であったと考えられる。しかし、一般病院において動物介在を行うには、様々な問題点も存在する。病院のスタッフの意識や構造上の問題、また動物介在療法の効果の普及なども今後の課題であると考えられる。